

KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
KODAK LICENSED PRODUCT



3022
7

三國一夜物語

第九編

浪路ハ一旦の意氣地よりて浅間照行に伴て播州鳩胸嶺の隠宅に在

富士 三國一夜物語卷之七

東都

曲亭主人著編



第九編

妓女節々死して夫より事

浪路ハ一旦の意氣地よりて浅間照行に伴て播州鳩胸嶺の隠宅に在
 こゝにも彼ホ母子が思ふ事多し邪有りけりよとも思ひ辨て後身とその人々
 任せたりしと悔をす度毎よりくもり幸多きを只とるもつて三五箇月を
 過せし一日照行ハ朝も夜より室津ある平馬が許へ行て密に入らば
 頃も雷無月のるらひひて降る降らふ時雨する野山の黄葉ゆるく
 早き散る遅き粉をまて眺殊さら栄ゆき憂を慰るよきものぞ
 ひとりの端らう立出らるる日頃とて門辺と往來するひとりの尼ありける

5/10

その羊甲八五十二ちうく姿の花はすれても昔ゆりした面影あらはに
世のうらやも染らざる白考の布子と腰衣を纏ひ細かなる脚草
鞋穿あめて項に掛る預陀袋六字の名號を書写その傍に播州
揖保西郡稲富莊信徳尼と記し鉦うち鳴し念佛高き唱て此へ
過つ南へ帰る券縁のみに彼此を修行するをんる殊勝なる浪路ハ
絶ど一捆の米を進らせ暑く寒くとも向う年々この日彼信徳尼ニ
むろり推見を背負ひ浪路が伴たる椽のやとりを走り来りしやう
あの児只今よくなづりとゆるが負ひたる腕いともえんが丁鷲あやう
抱きあつてのりまといバ浪路いともを得る抱きあつてこれを見れば此
あり疮瘡病バこそ甚深の預中と被せ顔に三ツ四七ツ玉蜀黍と少

ちらうらうらう義考紫衣の直バ如きは親疎に拘りて可也死
物も是れ拘りては却も中らふ中て信徳尼に對ひては身毎ハハから
小兒と推方へひりるも是ハ家老の孫やわらひむといと信じて
信じて信徳尼答へりやう尼が親屬ハ或ハ死せ或ハ往方多くりて
世にも人も捨らしてこれバ憂さなものの磯もつねに死るりて信じて
孫との死に本かものわらねるるに只今城山と越来をバツの狼の思を引
合て葛地と馳來るよとを殺して人と救ふ元より佛の誓願をり迎も
捨つるこのなるまは背向も辟逃まはゆく死路に立ちあがり口を佛
菩薩の御名を唱へつ持る念珠を投つけし諸佛の衛護やあし
んこの思の運命やつらうけん狼はこまを驚き推見と地を捨盡

果して一界の産毛胎帯ありて上り明德三年壬申八月甲戌日生る其
 州浅澤の住人富士太郎知一が息子敷太郎と記し其浪路の阿
 鷲鷲て思ひ手抱きし其母の死に覺ては出すをゆり揚くする間
 又すやくと睡する時信徳尼のひき今胎帯の書封をんれが思の
 父母ハ津の國の入りてのり一三三度彼地より狼がくるくんと来りて
 今ハこの國へ移る住り或ハ旅路をて合去らるつとわが。あ
 且ハ尼ハこの地の歌泊いさらり安住居すと普く索わてりわハ津
 の國までも索わてりけ且と書字山三十三度詣す死願ありと
 既三十三度の詣り聖母その頃ハ又登山してその願を果さると思
 ひて一とりの思ひ撃きて後生もいをハ月ハ事しけ且と情ある人と

かまわらせてはるる。ゆめ推見と志し國りてるるまらるる浪路言
 てらぬとてくまららる乳汁さるた初てあも痘瘡と病のな且も養
 育んハいとおちつるるはの。あつめまど。よとそも世の幸きて親とりの
 あもゆらさるるあもゆらさるる草のねむれにもむらとるものなれ
 外のさびさるるあもゆらさる。よとの子が長さるる迄養育てその親達も
 むららるるあもゆらさるるあもゆらさるる夫ハ男とて物の哀れも辨さ又姑の恨推
 て量つてあもゆらさるるあもゆらさるる美引がてけりとの信徳尼押入て否との言ひて主
 人のあもゆらさるるあもゆらさるる姑ハ佛も事て功德を積む志ありのあもゆらさるる
 門へ掲出のあもゆらさるるあもゆらさるる高燈籠にてあもゆらさるる浪路はて膝をすめこれ其
 何のあもゆらさるるあもゆらさるる日本疑はしむこの燈籠ハ何ゆと掲出のあもゆらさるるあもゆらさるる



問て信徳尼の燈籠を益するに益ありと答て明白にもおろしき志
 かるこの燈籠を益するに益ありと答て明白にもおろしき志
 信徳尼彼の燈籠を指しての母尼近曾書字法花兩坐の山あて説
 法と聽聞せし燈火を供養する人その功德の勝るるの法華經にも
 見え一香燈を供養する佛道を成と説のり又華嚴經に燈八能
 闇を破るを以て菩提の心支煩惱の闇を破るの喩譬一燈を闇室に
 入るが如し百千年の暗も悉く破盡す菩提心の燈も亦復如是衆生
 の心室に入ると如し百千万億不可説劫の諸業煩惱障の闇障も咸
 除盡すを説多りの子て諸經要集にも阿舍王舍衛城より祇園に
 至るに万燈を燃す會女一燈を燃す猶その功徳ハ勝るとやよりて今

この燈籠の功德をどうし長者の万燈も勝るべしと云ふと夜山と越すの
 郷導する由る路に迷ふといふ事々暮より曉に夢をみて十方世界を照す
 るの事々此の功德をどうし善報ある家々善報の子を托むといふ事々
 辞め入る事々の事と姑肉は信えぬといふ人も高燈籠ハ敵を防ぐ
 暗号も由る事々して狼の目より救ひて又虎の頭へ陥らる兒の命の危し
 冥風前の燈之時卯原ハ一室に二五十二岐流と障子母をら別明て立出
 つ信徳尼に對しての事々今この事々の事々も信り信らねど信者信ひ
 子あるひてこの親も亦赤ねぬ事々と宣はすハ大なる慈悲なり
 哀れをばららる此の方をも入母進らせ便事もらざるべから母浪路に
 瘡病は推児を端ちくち死て山風なる當のひとま且母乳汁も多り

彼の母も夜の目を安らふ睡らふ。さうしてその推見の富士太郎が二子殿太
 郎をいふのうらやまを胸帯に記しゆらひ。さうしてさういふ夜もこれぞ
 富士を欺引よする究音の入質よりさういふを困うて輒く返撃のさ
 へおとと思ひしうら直の室に到て照行の告つるの照行のりし二葉を
 ねた根を断されば谷を用るの悔の殊さらさまがく長門のありし日或
 医師の物ぐさく七才未満の小児痘瘡の見點より十五百迄の間にその鮮
 血をとりて陰乾せし。如此の藥種を合せて飲ませし髪毛忽地白く變り弱
 きもさうから老くる如くと語りし事あり。只一人の富を怖るてり返
 斯てのりなきさまで仕官をせし至つて大く言を認められし室町殿へ
 の婿を悼て聘しする諸侯もゆらゆら幸あるる彼敵太郎が鮮血を

用て伴の奇藥を調合し。口を立地し形を變りて後身すく仕官すべし。又
 富士太郎が當國のあり夏よく汝さでせり。彼を撃せんはゆと易し。
 といふ任せたる殺生するぞろ。は身があらば夫の立刃殺すべき筋な
 り。誘ひの思をそとへあつて。別骨尖刀にて招き。いふ身
 を切らうと思ひぬ。浪路の浪路のさすく。いふと手と胸とを切り抱締る
 べし。声もそと泣推見の楯をさす。袖を絞めたり。が且ていふ。さう夫は
 免す。角すれ羊老のいひ。似げさす。ゆるるす。て人を殺すものハ
 又殺さるべき理あり。彼も一人我も一人潔く名告ゆひて。鮮血をとりて藥を
 宜し。縦敵の思もゆき。東西のふらぬの。鮮血をとりて藥を
 形を變り世の人を欺く。男の安樂を圖らせ。さういふ。さう腹を

富士太郎魚頭と実中も被泣声ハ仮初中もびびる事も皆え手内身先
裡へ入つて外からその光景をうけて来たものと命すまは桜子先で走り
着て諸折戸をひらきとまきづくに誰と答るものもろくハ押がま
まぬ用事一ハ庭を過りて坐敷のうへへ歩とあつてまき金に照行ハ毎
の卯原敵太郎と膝を引布れて十日もまりの月よりもる不先尖刃を
のて目今突抜んとあつてろく金に桜子吐嗟とうち駭きまき金にまき
よと夫と告るまきもろく懐劍引抜て走つろくを卯原も桜子と見
て敵太郎をち捨ちた忽地庭へ跳つて出彼尖刃をとりまき一ハつて送
とまき二折三折のてまき桜子も懐劍をちまき一ハまきを撲地と踏
倒し起ちまきまき黒髪をまき捲きまき眼を睜きまき声高きまき罵るまき

汝ハ浅沢ぬてをろく一會一富士が妻の櫻子ぬとまきこの稚児を
四みして汝ホ夫婦を引よせんとしてまきの入より待よびろく汝
一人ぬてろくもあつて富士太郎ハろくちああるまきろくろく告よま
まきまき頭を土に摺つてまき續責り櫻子が怒りの涙地を
潤し及ろくさんぬも手弱女のせんまきまきろくろくえれば卯原ハ
ろくろくと冷笑ひろくろくまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきも歸されど別骨尖刃の相伴せよとのひつ又とろく揚る折しも
飛来る手裏劍ハ膳三枚打ぬまき叫苦一声仰きぬ卯原ハ何とて
息絶れ櫻子ぬて身を起し椽頭ぬ走りよりまき敵太郎を擁抱て勸
め目と配り心のまきまきまきまき富士太郎ハ手裏劍を卯原を斬く撃

早く生垣押破り身とあつて。椽の閃りと飛揚りし照行のあつちあせ。
 眼前老母を撃れり。逃ぐるるるやある出よと叫びつとくと歩よ。
 小坐舖の肝響音して浅間もつら。歸りけん隔の杉戸を貫きり。裡より丁を
 突出と鎧の蛭巻の捆と思ふまふ富士太郎の仇人を前引よせて片手
 抜り刀の鏝際衝とむ彼方の魂銷声蹴放を枚戸掻遣棄首を取んと
 立ちよて刃れが思議や刺単の仇人照行のあつちあせと。婢妍の一人の女子
 短き鎧を手に持りて。血の金直を卧れど何人ぞ驚問の女子のあつちあせ
 けりてのふ兄う小雪を足よまれのひらうとのふあやまてうち。駭き熟視
 且往ゆる年生別は妹の鳴乎割輕。のふせん思ひかけごととらうら
 疑ひ惑ふ櫻子も連忙走り来り仇人照行が身あつちあせ家兄の撃れ

のふ仔細ぞゆらゆら苦む語ると惑ひとまらうとよとのひつ。勸る嫂も
 せりゆめのと女子の親ととよとのふと小雪の涙とと死拭ひ人よとわら
 ぬらう人と語るも後やけけりて。己まん更さらねばむまなく
 中すよととらう過つる年五四郎の拐掣ととゆ路のうよ長門なる。
 赤間が關に售遣らる浪路ととむむはるるるらるるの甲斐の
 とと敷はそゆく夜ふる里の空あつちあせ。年と種と今茲弥生のすま
 りのらん都がのさすらひ人照行のあつちあせ。そのこと端なくとひ
 思ひまで送る妓院と逃さぬらの播磨路の伴と。照行の赤間
 関を奔るる死を。卧房とよにせ。浪江とゆる傷草の遊行女を
 刺殺し。さらす顔ととわつちあせ。とらう後とととと借してとらうとらう

浪



憎らるるがら。物ても今入るる。へききとなく。宿のるなま。く。むる。く。も。徒。
 居る。照行が。母子の。あを。き。ろ。悉く。道。ゆ。ら。ぬ。と。の。て。い。く。疎。ま。く。
 ぞ。折。も。ま。さ。の。指。富。多。信。徳。を。い。の。尼。法。師。城。山。と。狼。の。咬。ま。ん。と。
 甘。推。見。と。う。ろ。の。し。て。救。ひ。し。り。を。て。の。家。に。伴。ひ。ま。つ。この。見。の。親。と。ま。る。
 ま。た。あ。い。一。関。の。と。の。い。ま。と。托。と。受。え。し。が。守。袋。と。臍。帶。あ。り。て。名。字。も。夫。
 と。ま。ま。一。く。を。む。よ。う。ら。ぬ。姑。う。ろ。を。甥。多。の。を。告。も。や。ら。ま。ず。兄。う。へ。駿。河。
 より。津。國。へ。う。ろ。の。住。ら。の。ゆ。り。ま。た。ま。ず。ら。ひ。て。見。を。失。ひ。ひ。ん。ん。父。母。の。
 泣。く。も。心。の。ま。ま。一。と。思。ひ。こ。も。り。し。ま。ま。推。見。の。痘。瘡。病。の。乳。を。放。し。
 母。と。慕。つ。て。声。と。い。ひ。泣。う。ら。す。と。つ。る。悲。し。さ。の。二。千。世。界。の。真。愛。苦。も。ま。
 ぞ。是。ゆ。へ。勝。る。ま。ま。と。ま。ま。と。ま。ま。と。ま。ま。と。推。見。の。鮮。血。を。採。り。て。

妙。甚。し。ゆ。ら。う。る。と。姑。の。鬼。く。く。罵。る。お。肝。つ。ら。ま。と。そ。の。故。ゆ。ゆ。と。母。を。バ。
 あ。く。の。ま。の。と。と。夫。の。本。名。舊。悪。を。と。り。て。明。す。悪。因。縁。を。た。ら。呆。ま。と。
 甘。ん。ず。ま。る。た。父。上。の。忌。日。ま。あ。ら。さ。る。の。ま。う。浅。き。や。見。え。仇。人。の。妻。と。ま。り。
 一。人。の。甥。も。殺。さ。る。形。と。変。り。世。を。貪。り。人。と。誑。る。妙。甚。し。ゆ。と。ま。を。看。く。仇。
 入。ま。も。甥。も。名。告。る。名。告。ら。ま。ね。ば。死。ん。と。い。定。め。つ。甘。れ。甥。を。救。へ。て。
 外。ま。ら。留。め。て。も。う。ひ。ま。た。女。子。の。と。ま。ま。う。ら。す。この。小。坐。蓋。へ。蹴。あ。ま。れ。て。
 出。る。ま。ら。ま。ね。屍。鎖。胸。の。板。戸。も。毀。ま。よ。と。う。く。の。か。せ。ま。く。その。ま。ま。
 仆。れ。お。い。る。お。兄。う。夫。婦。幸。に。索。ね。来。り。ひ。て。見。を。救。ひ。て。仇。人。の。老。母。を。即。
 坐。し。殺。せ。と。め。る。ひ。一。且。の。危。急。を。脱。る。た。似。い。ま。ま。長。ま。ま。り。て。八。夫。の。徒。
 へ。婦。の。道。と。の。て。い。い。兄。の。姑。の。仇。人。も。又。切。て。い。父。母。の。徒。子。の。道。と。の。て。

のハ夫ハ父の仇人なり。この為一と玉掛等々。ついに分んか。うきまは。び
 兄。又ひひて怒。きて夫。うら。うら。外。い。わ。ら。と。心。を。定。鎗。架。の。鎗。と。把。抄
 戸。を。隔。て。突。出。す。も。り。謀。して。兄。を。傷。つ。け。え。ん。と。そ。こ。に。思。ひ。こ。も。り
 けり。と。語。る。も。息。の。下。き。けり。様。子。の。味。氣。を。死。小。雪。が。う。を。夜。毎。に。憂。を。我。者
 二。方。へ。右。門。が。柱。死。五。四。郎。が。う。ら。死。埋。に。陥。り。去。来。し。と。そ。こ。と。と。と
 る。く。語。る。ハ。富。士。太。郎。も。両。隻。の。眼。を。ま。げ。だ。死。父。と。浅。間。の。怒。ま。し。より。
 思。ひ。を。焦。し。身。を。棄。し。今。も。う。ら。う。と。照。行。が。隠。家。へ。索。ね。ま。り。ま。す。も
 けり。仇。人。の。面。と。う。す。却。て。妹。を。殺。す。の。つ。ま。ま。ら。回。目。を。こ。ま。し。つ。けて
 も。痛。志。死。の。母。の。心。の。自。害。志。の。今。殺。ま。す。小。雪。と。ん。ず。あ。え。る。の。後。の
 う。ら。う。と。迷。言。ゆ。も。あ。え。る。の。こ。の。う。ひ。ま。く。兄。を。そ。ろ。ひ。て。あ。た。脚。す。も

吊。進。ら。せ。び。の。う。ら。の。嬉。し。き。受。め。ん。と。ま。ま。環。會。多。ら。兄。が。又。は。妹。を
 非。命。の。殺。す。悪。業。ハ。過。世。の。報。ら。ん。と。ま。ま。の。声。小。雪。が。耳。を。入。の。ん。や
 色。惨。ま。る。顔。を。上。り。の。母。も。の。世。の。在。ら。ぬ。宣。ハ。す。叫。意。と。声。引
 息。を。あ。へ。ま。も。緯。断。し。く。様。子。の。顔。の。声。を。惜。ま。か。泣。を。か。つ。と。富。士。太
 郎。ハ。い。と。う。ひ。ま。と。勵。し。つ。猛。然。と。ま。あ。り。照。行。家。に。わ。ら。す。も。程。遠。ハ
 とも。ゆ。り。その。行。先。と。驅。索。ゆ。本。望。遂。ん。誘。め。て。妻。子。を。掖。す。の。も。ま。に
 走。つ。と。する。庭。面。の。卵。原。ハ。そ。ら。死。志。を。な。ん。と。と。毒。蟲。と。起。わ。り。と。ま。ら
 求。食。て。強。く。入。る。親。子。三。人。の。旅。鳥。目。今。思。ひ。ま。ら。す。と。あ。り。て。彼。尖。刀
 を。引。提。つ。と。ま。あ。た。ら。か。ら。椽。頬。の。柱。に。繫。し。高。燈。籠。の。索。と。丁。を。切。断。バ
 せ。つ。と。滅。する。燈。火。の。闇。に。閃。く。富。士。太。郎。が。刀。の。下。に。卵。原。が。首。ハ。落。て。鮮。血。と

塗まろり浩河一山前山後四面八方に喊声發つと貝鉦太鼓の音逢ふ響
 てやこの野よりくぐりぬ富士太郎耳を側て廢ゆらゆる松が枝を攀
 登りてつまずくらく実駮いき蕉火りるそのこの高燈籠の火を滅と
 りて暗号を平馬が黨助太刀を七つ目と替んとすをわたり繼數百令を
 ぞり圍も雙敵ハ照行一人をえらとちの替りて切死せんとひもあ
 ぶ松が枝より飛下つて南とさして走びるハ接子も後を引つて
 ぞ走まらる。

高木與曾

三國一夜物語卷之七終

酒方
 佛
 生道

市川
 春
 花



